

鼎談：小さなかけらを遠くまで

—『花火』の四半世紀—

古川ちかし・吉田藍・富永悠介

雑誌『花火』とは、東海大学日本語文学系の選択授業「報道写作」クラスが、911 地震直後の 1999 年 10 月から取材、編集、発行している日文・中文バイリンガル情報雑誌。読者は日本、マレーシア、香港、韓国、フィリピン、スリランカなどの日本語使用者¹。発行部数は平均で 230 部前後。ここ数年はデジタル発行も併用しているため印刷部数は減っている。一学期に1号～2号発行し、2025 年 4 月現在で合計 88 号を発行。

富永：今日は雑誌『花火』のこれまでの経緯、その意義、そして今後について、過去に総編集長と
うか「社長」をされたお二人に来ていただいて、これから社長を引き継ぐ私がいろいろお話を
うかがおうと思います。今日のために、古川さんからいくつか創刊当時の資料を提供してもらっ
ています。その中に 1999 年の授業科目名一覧があるんですが、そこでは「習作 A」と「習作 B」
となっているのが後の『花火』ですよ。

古川：「習作」とか「高級会話」とか、台湾にきたばかりの私には中身がよく分からない名前のクラス
が多かったですね。しょうがない
から学生たちに聞いたんです。
このクラスは何をするのって。高
級会話っていうクラスは、結局、
やりたいことによって中をいくつ
かのグループに分けて、各グル
ープがその週にクラス全体で何
するかを決めて、持ち回りで好



左から古川、吉田、富永

きなことをしました。私が準備とか手伝えるところは手伝って。何をするのか、何をしたいのか、
ってような質問って、どうして日本語を勉強するのかっていう質問にいきつくんですけど、
だいたい当時の学生たちの答えは「**日本時代には日本の言うことを聞くための日本語教育だったけど、今は私たちが自分の言うことを回りに(日本だけじゃなくて)聞いてもらうための日本語**」だから昔とは違うんだ、と。特に「習作」クラスの学生がそう強く主張したので、じゃあ、やってみようと雑誌による情報発信を提案しました。何年後か忘れましたが名称が「報道写作」に変わりました。

富永:あまり授業って感じじゃなかったですね、私が途中でTA やってたときも。

古川ちかし:恐縮です(笑)。まあ、本気で模擬雑誌会社としてスタートしたんですよ、本気でやらないとゴッソになっちゃいますから。最初のころは、どこからも補助金がなかったので、購読料の徴収の他に近所のお店から広告をとったり、資金集めのためのバザーをやったり。雑誌を作って配布するのに実際に金がかかるわけで、金をどう作って、どう使うか、それも含めて全員で考えて工夫していく。右の写真は花火のファンド・レイジング。蚤の市だったりクッキー売ったり・・・。

富永:後の方では学科から補助が出るようになったんですよね。

古川:そうなりましたが、補助金だけでは足りなかったので広告取りも、ファンド・レイジングも続けました。



花火のファンド・レイジング(2013年)

吉田:今は学科も少し苦しくなって、結局私の代では印刷数を減らしてその分、ネットにデジタル版を出すようにしましたけどね。お金がないなら作っていいこうみたいな発想は、今はたぶんなくなったというか、むずかしいだろうと思いますね。その分、自分たちで作ってるんだという感覚が薄れてるのかもしれない。

自分のことば

富永：最初の一年が終わる 2000 年 5 月に『花火』第四号が出てますが、その端書に古川さんが書いてること、私も別の大学で『花火』に似た雑誌作り²をしたときに思ったことなので共感するんですが、ちょっと引用させてください。

第4号端書 小さなかけらを遠くまで

花火第四号を発刊。関係者一同、読者のみなさんに感謝。「出来」の悪いところをご容赦いただければ幸い。記者諸君の「経験」の、「思い」のかけらが伝われば幸い。引き続きのご支持、ご支援に期待。

小さい新聞には、小さい経験、小さい「思い」が小さく入っている。小さいなあ、と思って眺めてほしい。頼りないなあ、と思って眺めてほしい。老眼の方は少し離して眺めてほしい。(中略)

小さくて頼りないものを、できるだけ遠くまで届けたい。でも、「ことば」はいつだってむずかしい。「ことば」は、さっと目の前を通り過ぎて、目の奥にさえ届かないかもしれない。出す人と、受け取る人とのあいだで「ことば」は宙に浮いて消えていくかもしれない。

これまで、ときに寝食を忘れ、ときに「まあ、こんなもんかな」という感じで、記事を書き、編集した記者諸君は、第四号をもって一区切り。第一号から第四号までのページのあいだに記者諸君の「自分のことば」がある。新しい記者諸君に経験を受け渡したいけれど、渡せるものと渡せないものがある。花火はまだ続きます。

2000 年 5 月 24 日

総編集長 ふるかわ ちかし

「小さい」というのがどういうことなのかいろいろあるとは思いますが、どうだ大きな事件だろ、重要なことだろ、というんじゃないけども、自分のところが小さく動いたこと、そういうことかなと思うんです。で、そういうところの動きを書いた「自分のことば」という言い方が最後に出てきますよね。古川：たしかに富永さんの言うように、何かを言いたくなるときって、何かしらこころ動いたときですよ。びっくりするとか、あっと思うとか、気づくとか……そこから出てくる声を「自分のことば」って



編集長と副編集長が仕切る編集会議(2007年)

言ってるんだと思います。

吉田: 語彙とか表現とかのレベル
での自分なりの日本語、という
意味ではなくてね。

古川: たしかに語彙とか表現とかと
言ってしまうと、何か違う気がし
ますね。

もうひとつの日本語

富永: これも事前に提供してもらった資料の中に、さっきの引用の一年後、2001年6月に、花火社第二期社員たちが退職する(授業を終えた)ときに彼らに向けて古川さんが書いているメールがあるんですが、そこに「もうひとつの日本語」ということばが出てきます。すいません、これも引用しますね。

花火記者諸君へ

一年間の仕事、ご苦労様でした。(中略)『花火を読むと「日本語でこんな表現ができるんだね!」という驚きがいつもある』と、ある日本の読者が感想を送ってくれました。これは、花火の〈言語〉に関するコメントとしては(私の考えでは)一番うれしいコメントでした。私も同感です。校正しているときに、私も(私にとって)新しい表現に出会うとうれしい。

日本人の使う日本語が一番正しくて、それ以外の日本語は〈間違っている〉とか〈自然じゃない〉という考えに、私は反対です。日本語は〈日本人のもの〉ではない。花火の日本語は、みなさんのもの、です。と同時に、日本の読者にとって〈もうひとつの日本語〉になりつつあります。これは大きな成果です。

内容的に花火が魅力的である理由は、みなさんが、それぞれの立場から〈言いたいこと〉をもって書いたからだと思う。〈言いたいことがある〉ということはすごく大事なことです。

大人になって自分の生活だけで忙しくて、何もほかの人に対して言いたいことが(文句以外は)なくなってしまうたら、とてもつまらない。ホームページも同じですね。言いたいこと、伝えたいこと、表したいことがある。それだけで「ことば」は生きてきます。これからも「ことば」を生きつづけさせて！！

2001 年 6 月 総編集長

ここでいう「もうひとつの日本語」っていうのは、語彙とか表現レベルという感じがしますが……

古川:「日本語でこんな表現ができるんだね」というのは「こんなことを」「こんなふうに言っちゃう/言っちゃえる」っていうことなんだろうと思います。その「こんなことを」「こんなふうに」っていうのは、何をどうとりあげて、どこから、どういうことばで、どう言うのか……ふーっ、何というか、そういう行為の全体ですよ。たとえばピンラン売りの女性が肌の露出が多いことを「少ない服を着ている」と表現したらその「表現」は新鮮ですね、っていうような部分というか要素の問題だけじゃなくて、実際にそういう女性たちに会って話して、そこで見たこと、思ったことがあって、そこからことばを探していく。

吉田:花火社は＜独自の取材による記事＞を原則にしてますよね、創刊当初から。

古川:はい。大原則ですね。

吉田:二次資料から記事を書くんじゃなくて現場に行って、関係者から話を聞いて記事を書く。身体を運んで行って、そうでなければ会って話をする事のない人たちと会って話す。そこから「へーそうなんだ」とか「おっとびっくり」とか「これは言いたい、伝えなくちゃ」ということが出てきて、はじめて記事になる。そこが“自分のことば”だということなんだろうと思います。



花火社取材風景(2019 年 第一広場)

富永:んー、でも、もうひとつの日本語、という時には、そういう“思い”と、実際に出て

くる言語(日本語)との間の繋がり、というのがあって、『花火』で言えば文字として、記事として

現れたもの—実際には文字と図版や写真との総合的なメッセージですけど—を言うと思うんですよ。

古川: たしかに現れなければ、見えないし、わかりませんよね。たしかに“現れたもの”ですけど、それを現(あらわ)しめている行為から切り離したくないんです。花火の記者たちが日本語を使うという行為の一部として“現れるもの”が“もうひとつの日本語”なんですが、それだけを取り出して、一人歩きさせて、何か(中間言語のような)システムになるとか、そういうところは『花火』とは関係ないんです。

吉田: 今の記者たちは、日本語に関してはみんな自動翻訳ソフトを使うんですよ。もちろん、取材はしてます。そこから記事を作るんですが、日本語のもとになるのは自動翻訳なんです。AIを使うと初期の『花火』のような斬新な表現というのは、それだけでは出て来ないわけですよ。あ、ここは面白いと思う部分はAIじゃなくて本人が苦労して書いた形跡があるところで……。

富永: それは私も感じますが、ただ、使えるものは何でも使えばいいとも思うから、自動翻訳もまた道具のひとつとして使えばいい。問題は、言いたいことと、表現というか言語の形との間がどういうふうに繋がっていて、そこに自分のことばが生まれるのか……AIや誰かから“与えられた言葉”を、ただ“与えられたもの”として、何だろう、借り物として何も考えずにとりあえず使ってるのか、それとも自分の言葉として使ってるのかっていう……

古川: 言いたいことがあって、考えてしまったときに、どこかからひとつの答えが降ってきて「ああ、こう言えばいいのか、なるほどね」となるなら、それってそのときだけじゃなくて自分の中に残りますよね。なんかってときに「あれ、それ前に考えたことあるぞ」って出てきて、今度はまったくその通りにじゃなくて自分流に変化させて使ってく、みたいな。

吉田: 言いたいことを作って、それってどう言ったらいいのか悩んで考えるというプロセスがあれば、ということですね。

古川: そのプロセスだけで十分ですよ、結果出てきたもの、表現が爆発、破綻してても。『花火』の場合、破綻しないぎりぎりの線を保つべく、みんなで校正しましたが、ミスもあるし、ときどき爆発もしてましたね(笑)。

吉田: そのプロセスがあるのか、ないのか、がときどきわからないんですよ。そこはどうしてましたか、最初のころ？

古川：うん、わからないですね。わからないけど、取材計画立てて考えて、取材して考えて、記事の切り口考えて、書いて考えて、日本語作って考えて、校正しながら考えて、排版しながら考えて、っていうプロセス全体の中での日本語作成ですから、その部分だけで、できてるともできてないとも言いにくいですね。

吉田：プロセス全体・・・少しぼんやりしてはいますけれど、何でも部分部分、要素要素に区分けして評価していく、そうしないと信用できないみたいな考え方よりはしっくりきますね。

コロナ禍での『花火』

富永：吉田さんは第八十三号から第八十七号を担当されましたよね。コロナ禍で『花火』を作るという大変な時期だったと思いますが、どのように『花火』を作っていましたか？

吉田：私が担当した時はちょうどコロナウイルスが最も流行した時期が終わった頃です。2019年から始まったコロナの世界的な流行は、場所によって様々でしょうが、外出を控える、マスクをして過ごす、人と食事をしない、オンライン授業など、東海大学の学生たちにもかなりの影響を与えたように感じます。

富永：先ほど、花火社の大原則は＜独自の取材による記事＞という話がありました。身体を運んで行って関係者に話を聞きに行き、そこから“自分のことば”が生まれてくる。でもコロナ禍ではそもそも人に会うことが出来ない状況でしたよね。そうした中で取材はどうしていましたか？

吉田：外に行き人に出て話を聞くことはできなくなりました。ただコロナによってオンラインが加速しましたよね。そうするとネットで取材相手を探してオンラインで話を聞くことができるようになりました。ただ古川さんが言っていた「へーそうなんだ」「おーびっくり」「これは伝えたい」という感動は減ったような気がします。

古川：そうした感動がないと“自分のことば”も生まれてこない・・・

吉田：そうですね。コロナと関係があるかどうかわかりません。そもそもコロナに関わらず最近の傾向なのかもしれませんが、花火作成に当たり、親しくない人とのグループ活動を避けたり、あまり遠出をせずに身近なところで取材テーマを見つけたりなど、行動範囲が狭まっている印象を受けました。他の授業でも放課後は友達と過ごさず、寮に戻ってゲームをしたり、図書館で本を読んだり、一人で過ごす学生が多いと聞きました。花火作成を通して、学生たちが自分たち

の関心事をシェアして、時間を約束して一緒に取材に行く。そんなところから少しずつ社会との関りを広げてほしいと思いました。

多様性の原理主義

富永: 古川さんはなぜ「もうひとつの日本語」を作りたいと思ったんですか。

古川: 作りたいっていうと、今ないものを作り出すって感じに聞こえるけど、そうじゃなくて、今すでにあるものを認知したいってことです。

吉田: こういう日本語もいいんじゃないかってことですね。

古川: 多様なものを多様なものとして認めるって言ったらいいでしょうか。そこに優生思想みたいなものを入れることをとことん拒否するっていう、多様性の原理主義みたいなものが1999年当時は、(私には)あったように思います。

富永: 日本語は昔から外から来た人たちも使ってきたし、地域変種³もたくさんあるし、日本が植民地を拡大していった時代には、同じように多様な日本語があったわけですが、それを切り捨てたり、禁止したり、ランク付けしてきた歴史がありますよね。

古川: そもそも多様な世界に“中央集権化”と“教育”⁴というのが入ってくと、だいたいいつも画一化というか規範化が起きるから生の多様性は生き残りづらい。それに加担しないような教育というのはないのかな

あ、と思うんですよ。一度、教育が作り出してしまった規範とか画一性を相対化するようなくもうひとつの教育>っていうのがあってもいいのかなあ、と。

吉田: それでも規範というか基本というのがまったくなくなってしまうと、多様性が互いにせめぎ合うための土俵もなくなってしまうって、ただ違うものがあちこちに存在しますってだけで、何だろう、変化も新しいものも生まれにくくなりますよね。だから、そうすると、規範というものをどこまで許容するかが問題なのかもしれませんね。



完成した雑誌を郵送する(2007年)

古川：校正作業は、まさにその「規範をどこまで許容するか」っていう作業でしたね。多様性をどこまで許容するか、じゃなくてね。

吉田：自分で破綻や爆発をしないように調整する力が必要で、その力を養成することが“自分のことば”作りにつながるんだと思うんですけど、その養成というのをどうやるのか……

古川：例のプロセス全体の中で徐々に出来ていく、と。

吉田：うー、魅力的ですが宗教的かな……信じないと(笑)

『花火』の今後

富永：『花火』のバックナンバーを見るとスリランカ、マレーシア、韓国、香港、タイからの投稿がありますね。

古川：一番書いてもらったのはスリランカ、それからマレーシアの人にも書いてもらったし、富永さんがタイにいた時はタイの学生にも書いてもらった。まあマレーシアもタイも単発で終わっちゃったんだけど。

富永：投稿記事は古川さんが言うように一回きりで終わってしまうことが多いですよ。いっそのこと今度は海外の人と一緒に『花火』を作ってみたらどうか。

古川：海外とのコラボですね。グッドアイデア！

富永：タイの大学とコラボできたらいいなあと考えてはいるんだけど、どうやって話を持っていくのかいつも悩んじゃう。

古川：カウンターパートになってくれる人が必要だけど、その人が『花火』に興味持ってくれて、同じような気持ちでやってくれば絶対できます。ただ仲間が増えればそれだけ問題も生まれやすくなる。『花火』も最初の頃、色々ありました。「同じチームの誰々さんは全然やりません」とか「何もやってないのに雑誌に名前出すんですか」とか。海外のどこかとコラボをすることになれば「台湾チームは仕事しません」みたいな問題は出てくると思う。だからコミュニケーションが大事ですよ。こうやって『花火』の将来の方向性が見えてくると楽しい。

富永：『花火』の今後ということで言えば『花火』をどう発信していくのかという問題があると思います。これは吉田さんがずっと考えてきた問題ですよ。

吉田：そうですね。実際に『花火』を作ってみて感じたのは紙はもうやめたほうがいいのかなという

ことです。電子化して日本語学科のホームページに載せているので発行部数は減っていますが今でも一部の読者には郵送しています。ただ紙が値上がりすれば印刷費も高くなるし郵送料もかかります。当然予算には限りがあるし、紙をやめてSNSやYOUTUBEで『花火』を発信できないかと考えてきました。

富永: インスタグラムで『花火』の情報や学生たちの様子をアップしていますよね。

吉田: はい。あと学生たちに「YOUTUBE やってみたい？」って提案したこともありますけど速攻で却下されました(笑)

古川: それは記事を書くプラス喋るみたいなこと?

吉田: はい。ポッドキャストもいいなと思ってメディア組を作ろうとしたんです。ポッドキャストなら顔も出ないし動画を撮る必要もない。喋るだけだよ。でもそれも却下されました。ハードルが高いのか、ただ単に面倒なだけなのか。却下の理由はよくわかりません。

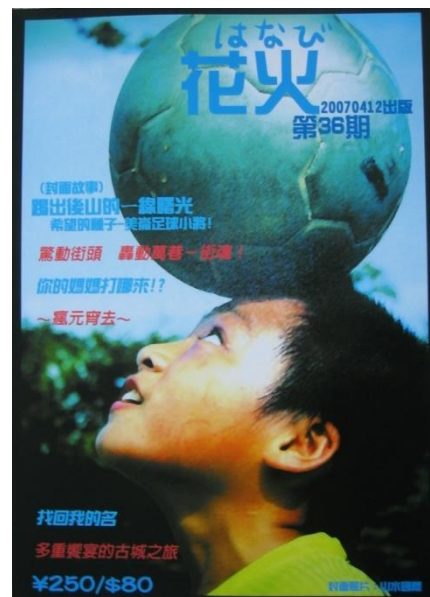
富永: 記事を書いて終わりじゃなくてポッドキャストを含めて『花火』だよとあらかじめ学生に伝えておくとか? あと、ポッドキャストやる場合、記事をそのまま読むだけでなくて工夫が必要だと思いました。

吉田: 原稿として記事は書いて、記事の内容をわかりやすくお喋りするとか、劇場会話風にしてインタビューなんかも入れたりできるし。

古川: あとポッドキャストや YOUTUBE はレスポンスが見えやすいよね。聞いている人がいるのかいないのか再生回数でわかる。

吉田: あとコメントもしやすい。

古川: そう。『花火』はコメントが出にくい。それは読者の顔が見えにくいということかもしれません。とにかく今のやり方ではインターアクティブではないですね。この問題は他の出版社も抱えていると思います。問題は学生たちがポッドキャストや YOUTUBE を研究したいと思うかどうかだけど。



『花火』第三十六号(2007年)

富永：古川さんは「小さなかけらを遠くまで」の中で「小さくて頼りないものを、できるだけ遠くまで届けたい」と書いていました。『花火』はこれまで「小さい経験、小さい思い」を聞き「自分のことば」で書いてきましたが、今回の鼎談を通して、その「小さい経験、小さい思い」をどうやって遠くに届けるのかという課題がより明確になったと思います。次号から『花火』を担当しますが、色々な人と繋がりながら小さい経験、小さい思いを聞き、自分のことばでそれをどうやって遠くまで届けるか考えてみたいと思います。【2024 年 9 月 8 日 象仔書屋にて】

（古川ちかし ふるかわ ちかし 花火社初代社長兼総編集長 東海大学日本語言文化學系）

（吉田藍 よしだ あい 花火社第二代社長兼総編集長 東海大学日本語言文化學系）

（富永悠介 とみなが ゆうすけ 花火社第三代社長兼総編集長 東海大学日本語言文化學系）

注

¹ 日本語を第一あるいは第二以降の言語として使用する人たち。「学習者」という呼び名は適切ではないので使わない。

² 雑誌『朝顔』は富永が前任校の学生と作った雑誌。2022 年 1 月に創刊号を出版、2024 年 1 月の 4 号をもって休刊。富永は 2021 年 8 月「日文習作」という作文クラスを担当した。当初は教科書を使って授業をしていたが「教科書が設定したテーマは学生が本当に書きたいことなのか」「モデル作文や文型を教えることは学生の表現を狭めてしまうのではないかと悩み、古川さんに相談したところ「じゃ『花火』のような雑誌を作ってみたら」とアドバイスをもらったのが創刊の経緯。

³ いわゆる“方言”もこれにはいるが、方言ということばには「中央の言語がまずあって、それが地方に分散して変種化した」というような誤ったイメージがつきまとい、生の多様性を反映しないので、このことばを避けたいと思う。

⁴ この二つは歴史的に結びついているが、それは必然ではないと考えたい。